



アメリカ文学論

D. H. ロレンス

永松 定 訳

彌生選書

フランクリン、クーパー、ポー、ホー
ーソーン、メルヴィル、ホイットマ
ン等八人の作家とその作品を通して
ロレンス自身の文学観を大胆に表明
したアメリカ文学論であるとともに
アメリカおよびアメリカ人、ひいて
は白人文明そのものに対して強烈な
批判・糾弾を加え、今日の文明の状
況を的確に予言した怖るべき書物。



永松 定（ながまつ さだむ）

1904年、熊本県生。東京大学英文科卒業。福岡大学教授、小説家。著書『万有引力』『田舎ずまひ』『永松定作品集』他。訳書、ハックスレー『恋愛対位法』ロレンス『芸術論』『D. H. ロレンスの手紙』ジョイス『ダブリンの人々』他。

〈落丁・乱丁本はお取りかえいたします〉

© 1974 彌生選書 28

アメリカ文学論

昭和49年11月5日 初版発行

訳者	永松 定
発行者	津曲 篤子
印刷者	白井倉之助
発行所	株式会社 彌生書房

162 東京都新宿区中町18番地
電話・東京(260) 3707(代表)
振替口座・東京 97315 番

印刷・精興社 製本・文勇堂
0398-74110-8525

D. H. ロレンス

アメリカ文学論

永松 定訳



彌生選書

目次

はじめに	7
地 霊	11
ベンジャミン・フランクリン	23
クレーヴクルの『アメリカの農夫からの手紙』	42
クーバーの「革脚絆小説」	59
エドガー・アラン・ポー	86
ホーソーンと『緋文字』	113

ディナの『平水夫生活の二年間』	142
メルヴィルの『タイビー』と『オム』	174
メルヴィルの『モービー・ディック』	195
ホイットマン	222
自伝的スケッチ	249
訳者あとがき	256

アメリカ文学論

はじめに

アメリカ合衆国の次のような主張にわれわれは耳を傾けよう。「その時はやって来た！ アメリカ人をしてアメリカ的たらしめよ、合衆国は今や芸術の面でも立派に成長した。今こそヨーロッパのスカートの裾にぶらさがるのは止そう。ヨーロッパという学校の先生から解放された小学生のようになるまおう」。

「ごもっともだ、アメリカ人よ、君たちがそのとおりにするありさまをわれわれに見せてくれ、さあ、大事な秘密を見せてくれ。きつと、大事な秘密があるというなら。」

かくて彼、すべての人より問われたり――

「かのアディング・ビフテキはいずくに在りや」と。

されば彼、すべての人に繰り返し答えたり――

「そは未だ見出されてあらず」と。

かの秘密は見出されているのか、いないのか？ もし見出されているとすれば、もちろんそれは、

ああ、アメリカ人よ、諸君の内部のどこかにあるに違いない。もちろん、それは旧大陸全土（ヨーロッパ大陸）に求めても無駄だ。だがそれと同様に、諸君がただそのことを主張するだけに止めるのなら、それもまた無駄なことだ。真のアメリカ人と呼ばれるこの新しい人間はどこに在るのだろうか。新時代の精子をわれわれに見せてくれ。ヨーロッパ人の裸の眼に見えるすべてのものが、アメリカでは、一種の不実なヨーロッパ人であるからだ。次代に繋がるこの絆（きずな）をわれわれは見たいものである。

さて、われわれ自身もまだそれを自分のものにはしていないのだ。したがって、唯一のなすべきことは、アメリカの藪かげにそれを探すことだ。まず初めに古いアメリカ文学を。

「古いアメリカ文学！ フランクリン・クーパー・ホーソーン会社？ あのかだらない言葉の堆肥！ 全くありもしないことばかりだ」と現代のアメリカ人は叫ぶ。

現実という言葉の意味は誰も知らない。現実とは電話、肉の罐詰、チャーリー・チャップリン、給水栓、それにたぶん世界救済だという。また現実とは水道管だというものもあるし、世界の救済だというものもある——この二つはアメリカの大きな特徴だからという理由で。なぜわれわれにはわからないのか。つまり新時代の若い精子はどうなっているのか。まさか誰しも自分が生れぬ前に自分を救うことは出来ない。

生れもせぬ精子の産婆たろうと努めているこの私を見るがいい！

現代文学の二つのグループ——ロシア文学とアメリカ文学——は、決定的な限界に達したようだ。フランスとかマリネット^①とかアイルランドの文学作品の小グループ（これらも恐らく限界にきている）などは一応除いておこう。ロシア文学とアメリカ文学を問題にしよう。アメリカ文学といっ

でもシャーウッド・アンダーソン⁽¹⁾のことではない。彼は実にロシア的だ。私のいうのはホーソーン、ポー、デイナ、メルヴィル、ホイットマンなどの作品のことだ。これらの文学は一つの限界に達したように思われる——トルストイ、ドストエフスキー、チェーホフ、アルツイバーシェフらの大作が反対側の限界に達したように。フランスのモダニズムや未来派の最も進んだ狂熱でさえ、ポー、メルヴィル、ホーソーン、ホイットマンらの達した最高意識の段階にはまだ達していない。ヨーロッパの現代人はことごとくその最高段階に達しようと試みている。右に挙げたアメリカの大作家たちはまさにその段階に達していた。世界の人々が彼らを怖がったのも、また現在怖がっているのも、そのためだ。

ロシアの大作家とアメリカの大作家との大きな相異は、ロシア作家が明確な表現を好み、能弁や象徴を逃げ口上にすぎぬものとして憎悪するのに反し、アメリカ作家がすべて明確なものを退けて、常に意味の二重性を造りあげているという事実のうちにある。彼らは逃げ口上が大好きなのだ。彼らは、自分たちの真実がバビルス⁽²⁾の箱の中に安泰に納まっていて、しかも慈悲深いエジプトの王妃さまか誰かが、その赤子を救い出しに来てくれるまで葦の繁みの中におかれていた方々を好む。

さて今こそ、アメリカがかつて産み出した真実という箱詰め⁽³⁾の赤子を、誰かが取り出しにやって来たわけである。子供⁽⁴⁾というものは、かまいつけずにそのまま放っておくと、すっかり痩せ細っていくに違いないのだ。

D・H・ロレンス

(1) 二十世紀初頭のイタリア生れの詩人。その未来派宣言(一九〇七)で知られている。ロレンスはこの前衛詩人から

かなりの影響を受けているといわれる。

(2) 十九世紀末アメリカの中西部派に属する新しい傾向の作家。「意識の流れ」的手法を駆使し深層心理にメスを入れたといわれる。『ワインズバーク・オハイオ』はその代表作。

(3) バピルスは古代エジプトあたりで紙を作った植物のこと。その箱は、したがって「書物」。

(4) 旧約聖書。赤子のとき章で作った籠の中に入れられてナイル河に流されたというモーゼへの連想。

地 靈^①

われわれイギリス人は古風なアメリカの古典を子供の本のように考えたがる。それこそ、こっちの方がかえって子供らしいのだ。アメリカの古典文学は一つの異国的要素を含んでいるが、それはアメリカ大陸にのみ在って、他の如何なるところにも属さないものなのだ。しかしもちろんわれわれが書物をお伽噺としてのみ読む限りは、それらのすべてを見失うのだ。

三世紀、四世紀あるいはそれ以後の世紀の本當の知識^{ハイブラ}なローマ人が、ルクレチウス、アプレウス、ターテュリアン、オーガスティン、またはアタナシウス^②の奇妙な言葉から何を読み取ったか人はわからない。イベリア・スペインの幻怪な声、古代カルタゴの不気味さ、リビアと北アフリカの情熱、本當の古代ローマ人はこういうものを少しも聞かなかつたと断言してもいいだろう。古代ローマ人は著作の表面から古いラテン的推理を読み取ったのだ。ちょうど現代のわれわれがポーヤホーソーンの表面から古いヨーロッパ的推理を読み取るように。

新声を聞きとることは困難である。ちょうど、未知の言語に耳を傾けることが困難であるように。われわれはただ傾聴しないだけである。古いアメリカの古典には新しい声がある。世間の人はそれを聞くことを拒んだのだ。そしてお伽噺についてお喋りをしたのである。

なぜか？——恐怖からだ。世間の人は何を恐れるよりも新しい経験きけんを恐れるのだ。なぜなら新しい経験は多くの古い経験を追放するからだ。そしてそれは、たぶん長い間決して用いられずまたは硬直しかかった筋肉を用いようとするのに似ている。そんなことをすれば、ひどく痛むのだ。

世間の人は新しい思想は恐れない。どんな思想でも握りつづすことが出来るのだ。しかし真実の新しい経験というものは握りつづすことは出来ない。ただ身をかわして避けることが出来るだけだ。世間の人は偉大な、身をかわすことの達人だ。そしてアメリカ人はその達人中の達人なのだ。なぜならアメリカ人は自分自身を、身をかわして避けているのだから。

アメリカの古い本には、何らの感情もなくしかもその感情のないことを誇りにしている近代アメリカの本よりもはるかに多く、一つの新しい感情がある。古いアメリカの古典には一つの「異った」感情がある。それは古い精神サイキから何か新しいものへの推移、一つの転位である。そして転位は苦痛だ。そこでわれわれは指でも怪我したように、それを繃帶ぼうたいしようとする。それを檻樓ぼろで包もうとする。

それはまた剪除だ。古い感情と意識の切り取りだ。何が残ったかと尋ねてはいけない。

芸術のみが唯一の真実だ。芸術家は通常呪われた嘘つきだ。しかし彼の芸術は、もしそれがいやしくも芸術であるならば、その時代の真実を告げるだろう。そしてそれだけが問題となるすべてののだ。永遠の真理なぞくたばりやがれ。真理は時代から時代へと生きる。そして昨日の驚嘆すべきプラトンは、今日はいいてい譚語たんごにすぎないのだ。

古いアメリカの芸術家は途方もない嘘つき屋だった。しかし彼らはそれにもかかわらず芸術家だったのだ。このことは、たいいていの現代作家について言い得る以上のことなのだ。

諸君は『^{スカーレット・レター}緋文字』を読むときに充分に楽しむことが出来る。あらゆる愛人のように虚偽の、甘

ったるい、碧い眼のホーソンという小男の恋人のひとりごとを、受け容れるとしても、あるいはまた彼の芸術の完璧の真理を読むとしてもだ。

文芸についての奇妙な事柄は、それがこのように恐ろしく言い紛らすということだ、という意味は、このように嘘をつくということだ。というのは、われわれは常に四六時中、自分で嘘をついているからだろうと思う。そして嘘の雛形からして芸術は真理を織りなすのだ。いつも一種のキリストとしてポーズしながら、小型の怪物として最も真実に絶えず自らを暴露しているドストエフスキーのように。

まことに芸術は一種の逃げ口上である。しかしそのお蔭で、そうしようと思えば、逃げ口上を見透すことが出来る。芸術は二つの大きな役目を持つ。第一にそれは感動の経験を与える。その次に、もしわれわれが自分の感情を認めるだけの勇氣を持てば、それ（芸術）は実際の真実の鉱山となる。われわれはこれまでに嘔吐の出るほど多くの感情を経験した。しかしわれわれは実際の真理、それがわれわれの孫に關係するかしんないかは別としてわれわれに關係するところの真理を、それらのものから決してあえて掘り出しはしなかったのである。

芸術家は通常一つのモラルを目指して物語を裝飾しようとする、またはそうする習慣であった。しかし物語は大体として反対の方向に向いがちだ。芸術家のそれと物語のそれと全く相反した二つのモラル。決して芸術家を信ずるな、物語を信ぜよ。批評家の正当の機能は、物語を創造する芸術家から、物語を救い出すことである。

今やわれわれは本書において自分のなすべき仕事があったのだ。アメリカの物語をアメリカの

芸術家から救い出すことだ。

まずこのアメリカの芸術家というものを眺めてみよう。まず第一に、彼はどうしてアメリカなどに行ったのか？　なぜ彼は彼の父と同じくなおヨーロッパ人ではないのか？

さて私の言うことを聴くがいい、アメリカ人芸術家の言うことを聴いちゃいけない。彼は君の予期するとおりの嘘をつくだろう。それも諸君が予期するのは、いくぶん諸君の方が悪いのだ。

アメリカ人は信仰の自由があった。自由を欲し、故国に踏み止まってそのために戦ったイギリス人によって戦い取られて。実際彼らは自由を手に入れたのだ。信仰の自由だって？　その存在の最初の世紀の間のニュー・イングランドの歴史を読むがいい。

とにかく自由だというのか？　自由の国だって！　ふん、私が彼らを不愉快にするちょっとしたことでも言ったとしたら、自由の暴民はすぐさま私を私刑に^{リンチ}するだろう、そしてそれが私の自由というもののなのだ。自由だって？　ふん、私は個人が同朋たる同国人をこれほど卑劣に恐れているどんな国にも今まで行ったことがない。なぜならば、彼らアメリカ国民は君が一たん彼らの一人でないことを示すや否やその瞬間に、君を私刑にする自由があるからなんだと私は言うのだ。

否、否、もしも諸君がヴィクトリア女王についての真実をそれほど好むならば、自分で少しやってみるがいい。

それらの巡礼^{ビルグリン・ファザーズ}の始祖たちやその継承者は、信仰の自由のためにこのアメリカにやって来たのではない。ここに着いたとき彼らは何を打ち立てたのか？　自由、だと君はそれを言うのか？

彼らは自由を求めてやって来たのではない。あるいはもし彼らが自由を求めてアメリカに来たのなら、彼らはひどい自家撞着をあえてしているのだ。

よろしい、では彼らは何を求めてやって来たのか？ いろんな理由のために来たので、なかでも何かの種類の自由を——すなわち、積極的自由を——求めてなど来たのでは恐らくないのだ。

彼らは主として逃げ出すためにやって来たのだ——あらゆる動機のうちであの最も単純な動機です。すなわち逃げ出すために。何から？ 結局は彼ら自身から。あらゆるものから。それがたいいの人々がアメリカに來、今も來つつある理由なのだ。彼らが現在あり、そしてかつてあったところのあらゆるものから逃げ出すために。

「これよりのちは主^{あるて}なからん。」

これは非常にいいことだ。しかしそれは自由じゃない。むしろその反対だ。どうにもならない種類の抑制だ。本当に積極的に成ろうとする、何ものかを発見するまでは、決してそれは自由じゃない。そしてアメリカ人は彼らが自分でない、ことについて絶えず叫びつづけていたのだ。もちろん彼らがすでに百万長者であるか、百万長者になりつつあるかを除いてはだ。

けれども結局その運動には積極的な面もある。ヨーロッパから船で大西洋を越えてアメリカに流入したあの巨大な人間生活の洪水は、ヨーロッパとヨーロッパ的生活方法の限定からの背離という潮流に乗って単純にアメリカに流入して来たのではない。この背離は移住の主要動機であったし、また今もあると信ずる。しかしその背離に対してさえも、何らかの原因があったのだ。

時として人間はどんな種類のどんな統制からも逃亡したいという熱望を持ったかのようなのである。ヨーロッパでは古いキリスト教が真の主人であった。教会と真の貴族とはキリスト教の理想を遂行する責任を持っていた、多少不規則的ではあろうが、やはり責任はあったのである。

支配権と王権と教権とは、ルネッサンス時代にその権力を破壊された。